

日本看護質評価改善機構が「看護 QI チャンピオン」授賞式を開催 病棟のグッド・プラクティスの可視化に向けて

一般社団法人日本看護質評価改善機構（代表理事：上泉和子氏）では、「Web 版看護ケアの質 評価・改善システム」を用いた看護ケアの質改善（Quality Improvement：QI）を目的とした質評価を行っている。同機構では、「質改善に尽力している病棟のグッド・プラクティスを見える化したい」という思いから、2019 年から「看護 QI チャンピオン」の表彰を行っている。2021 年 9 月 5 日、第 2 回授賞式がオンラインにて実施され、基調講演の後、3 施設が表彰を受けた。この模様を報告する。（本誌編集室）

基調講演「改善（KAIZEN）—マグネット認証への旅」

授賞式に先立ち、聖路加国際病院副院長・看護部長の鈴木千晴氏が「改善（KAIZEN）—マグネット認証への旅」と題し基調講演を行った。同院は、2019 年 11 月に日本で初めてのマグネットホスピタル認証を取得。講演では、2012 年 12 月に同認証へのチャレンジを表明してから長い道のり（マグネットジャーニー）を共有した。

ナースの代表者会議による好循環

マグネットホスピタル認証をきっかけとした同院の取り組みの 1 つに「ナースの代表者会議」がある。専門看護師や認定看護師、ベテランのスタッフ、育児中のスタッフなど、各部署から多様な代表者が参画し、スタッフ自らが問題提起し、改善への取り組みを検討する会議である。現場の問題点や不満を解消するという視点から、特性を伸ばすための前向きな会へと成長している。

同院では、個々のスタッフの専門性を重視する観点から、部署間の異動はあまり多くない。異動の少ない組織では部署間が孤立しがちであるが、この会によって、部署間の情報交換がスムーズになっ

たという。そして、育休明けの職員を育児中の先輩スタッフがサポートすることにより働きやすくなり、そのときサポートしてもらったスタッフがまた後輩をサポートするという好循環が生まれているという。

改善—ベストプラクティスを探す

鈴木氏は、改善に際して重要な点は、「まず現状分析を行い、どのような状態になればよいか、すなわち目指す姿を明確にすること」だと指摘した。学会のガイドラインや文献を検索することはもちろんのこと、院内の他部署などが持つ身近な看護実践やナレッジに目を向けることも重要だと述べた。

「改善」と聞くと、どうしても欠点を改善するという視点になりがちだが、よいところを見つける、これが改善につながり、部署間の連携強化にもつながるとした。

このように育んできた組織は、コロナ禍における対応にもとても強いことが分かったという。同院では、院内のイントラネットで、それぞれの看護師がその都度メッセージを入れ、共有し、現状で何ができるのかを自ら考え、その中でよりよい看護ができるように努力している。これはマグネット認証への道のりがあってこそだと思う、と述べた。

最後に鈴木氏は、看護 QI チャンピオン表彰について、「ベストプラクティスがさまざまな施設で共有されることが、改善の成功へとつながっていく。成果を認め合うこと、楽しむことが、次の活動のモチベーションとなる。皆で改善活動を楽しめるとよいと思う」と期待を述べ、講演をしめくくった。

3 施設が受賞

続いて、2019-2020 年度の QI チャンピオン授賞式が行われた。構造・過程・アウトカムの全てにおいて最も高い評価



富山大学附属病院 NICU・GCU の方々

であった病棟に贈られる看護 QI チャンピオンは富山大学附属病院 NICU・GCU が受賞した。また、前年度より大きな改善が見られた病棟に贈られる看護質評価改善賞は、宮崎県立宮崎病院 4 階東病棟（産婦人科病棟）と、現在新型コロナウイルス専用病棟として稼働する東京臨海病院 7C 病棟が受賞した。

授賞式では、審査委員長の坂下玲子氏（兵庫県立大学副学長）が表彰と総評を行った。以下に各受賞病棟の喜びの声を紹介する。

看護 QI チャンピオンを受賞した富山大学附属病院 NICU・GCU

当病棟は三次救急センターとして、富山県の母子救急医療における中心的役割を担っている。90%以上の病床稼働率であり、患者重症度も高い。自己満足ではなく客観的な看護の質評価を受け、改善していきたいと考えたことからこの取り組みが始まった。

看護 QI の尺度を用い、成果を見える化しながら改善に取り組んだ。改善計画を実践した中で、最大の成果と感じているのは多職種協働の構造・過程の構築で、これがアウトカムの改善につながったと考えている。

当院 NICU・GCU の理念は、「安全な医療・看護を提供し、ご家族とともに赤ちゃんの成長を見守る」である。この理念を医療者だけでなく、ご家族にも見える場所に掲示している。理念が浸透し、これを基本としながら看護を考えられる組織風土や柔軟性が培われたことが看護



宮崎県立宮崎病院 4 階東病棟の方々



東京臨海病院 7C 病棟の方々

の質の改善につながったと考えている。

このような賞をいただいたことに深く感謝し、これからも看護の質向上に励んでいきたい。

看護質評価改善賞を受賞した宮崎県立宮崎病院 4 階東病棟（産婦人科病棟）

コロナ禍で面会や分娩時の立ち会いなど、制限をかけており、患者さんにご不便をおかけしている中の受賞に心から感謝している。毎年、日本看護質評価改善機構による質評価を受けており、安心・安全な看護を目指して取り組んできた。自分たちの看護を振り返り、まい進しようとする取り組みが結果に出てとてもうれしく思う。協力し合える看護部全体の体制、連携している地域職員、協力してくださっている皆さんのおかげだと思う。

これからも当病棟に入院してよかったと思ってもらえる看護に取り組んでいきたい。

看護質評価改善賞を受賞した東京臨海病院 7C 病棟

当病棟はもともと消化器外科病棟であったが、現在は新型コロナ専用病棟として運用している。

構造・過程・結果の3つの側面のうち、構造の得点が高くないにもかかわらず、他領域の得点が高いことは、看護スタッフの努力によるものと考えられた。ここに依存しない仕組みを整えることが重要と考え、ベテランスタッフの看護を若手スタッフが学べるよう、一緒にラウンドするといった具体的な仕組みを整え

る工夫を行った。

看護を取り巻く外部環境や内部環境が変化し、患者の特徴が変わっても、構造が整うと状況に合わせた柔軟な対応が可能になることが分かった。看護ケアを振り返る機会を与えてくださった皆さまに深く感謝申し上げるとともに、今回の結果からも多くの課題が見えているが、この受賞の喜びを糧に、これからも質向上に努めていきたい。

次回は新たに「特別賞」も設置予定

最後に、代表理事の上泉氏が、「コロナ禍で、本授賞式をどのようにするか、いろいろ考えながら準備を進めてきたが、このようにオンラインで開催でき、柔軟な対応に深く感謝するとともに、受賞された皆さまに心からお祝い申し上げます。評価を受け、改善していくに当たって苦しいこともあるかもしれないが、改善への旅が、楽しい旅であるように心から願っている」と述べ、授賞式が締めくくられた。

日本看護質評価改善機構では、今後も2年ごとに表彰を行う予定である。さらに、今回表彰した看護 QI チャンピオンと看護質評価改善賞のほかに、特別賞を設置し、得点に表れにくい病棟での努力を可視化していきたいと考えており、自薦・他薦含めて応募を求めているとのことである。

日本看護質評価改善機構ホームページ：
<http://www.nursing-qi.com>